

半世紀ぶり 納骨の旅

強制連行…朱鞠内などで犠牲の10人

戦時下の朝鮮人強制連行などで、空知支庁幌加内町朱鞠内のダム建設や鉄道工事(深名線)で犠牲になったりした人たちの遺骨十柱を韓国の国立墓地に納骨するため、在日本大韓民国民団(民団)の道地方本部などの一行七人が三十日、新千歳空港を出発する。十月二日、ソウルの南、天安市の国立墓地で営まれる海外死没者の慰霊祭「望郷祭」に合わせて納骨されるもので、犠牲者は、亡くなってから半世紀余りを経て祖国に帰ることになる。

韓国で来月2日埋葬

民団ら一行30日出発

一行は、民団道地方本部の三人と、朱鞠内の強制労働の実態解明などに取り組んでいる空知民衆史講座の三人のほか、自らもダム工事で働かされた紋別市の在日韓国人の朴南七さん(七四)も納骨されるのはダム工事などの犠牲者の遺骨八柱と、空蘭、札幌の寺に預



けられていた二柱だ。

民衆史講座は、これまでの調査で、朝鮮人三十六人を含む二百四人の犠牲者を特定、遺族を捜すなどしてきた。八〇年代初めには、犠牲者が埋葬されているとされる朱鞠内湖畔の笹やぶの下から十六柱の遺骨を掘り起こした。こうした活動の中で、九二年に二人の遺骨を韓国の遺族に返したほか、日本人犠牲者の遺族に

も遺骨を返還。残る十柱のうち八柱について、遺骨の掘り起こしにかかわり続け、朴さんが「同胞の遺骨として祖国に返したい」と要望し、深名線廃止に併せて朱鞠内で今月三日に開かれた追悼法要で、朝鮮人犠牲者の遺族代表との立場で、朴さんが八柱を引き取っていた。

ほかの二柱のうちの一柱は、戦中から空蘭市内の寺に預けられていた女性の遺骨で、市内の飲食店で働いていたらしく、雇い主と見られる朝鮮人男性が「一時預かってほしい」と寺に預けたままになっていたという。もう一柱は、昨年十一月に七十七歳で死亡し、札幌市の寺に遺骨が納められていた男性だ。

深名線廃止に併せて開かれた追悼法要で、朝鮮人犠牲者の遺族代表という立場で遺骨を受け取る朴南七さん(右) 11月3日、空知支庁幌加内町朱鞠内で

望郷祭は、天安市郊外の国立墓地「望郷の丘」で年一回営まれ、今年は二十回目になる。今回は、政府関係者や遺族ら約六百人が参加するという。